

エズラ記に引き続きネヘミヤ記を読み進めます。エズラ記とネヘミヤ記は同じ時代、つまりイスラエルがバビロン捕囚から帰還する頃のことです。

書簡の冒頭、「第20年のキスレウの月」と語られていますが、2章を読めば、「アルタクセルクセス王」の時代であるかと考えられます。つまり、BC445年頃かと思われます。

前書のエズラは、イスラエルの祭司であり、書記官・律法の専門家でした。純粋に主なる神を信じ、イスラエルのために働いた人でした。それに対してネヘミヤは、ペルシャ王アルタクセルクセスの献酌官として(11)、ペルシャの首都スサに滞在していました(1b)。献酌官とは、王の護衛を行う信頼された者が行う重要な任務です。つまり、ペルシャ王に対して直接言葉を語ることができる立場であったことは、エズラとの大きな違いです。そしてペルシャとイスラエルという国と国の関係において、ネヘミヤは重要な人物でした。

そしてネヘミヤの時代、捕囚の間もエルサレムに留まり続けた人たちが、さらにすでに帰還した人たちとの間には交流があったことを、聖書は語ります(3)。アルタクセルクセス王の第20年(2:1)であれば、エズラが帰還し、神殿を再建の後のことです。しかしこの頃、エルサレムの城壁は打ち破られ、城門は焼け落ちたまま(3)でした。

エズラ記においても、カナンの原住民、さらにはサマリア人からの攻撃が繰り返し行われていたことが語られていましたが、このときも繰り返されていたのです。

エルサレムの状況について報告を受けたネヘミヤは、泣き、嘆き、主なる神に祈ります(4)。祈りについて(参照：ウェストミンスター大教理問答問185)。そして私たちが主に祈りを献げるとき、多くの場合、自分たちのこと、そして今のことを祈ります。しかしネヘミヤは、エルサレムにいるイスラエルのために執り成しを祈りますが、現状のみを訴えることはしません。イスラエルとして主の御前に罪を犯したことを告白します。直接的にはバビロン捕囚にいたったイスラエルの罪が念頭にありますが、モーセによる出エジプトから現在にいたるイスラエルの歴史を顧みつつ、罪を告白します。

ここで今に生きる者が、過去の人々が犯した罪の責任を負わなければならないか、否か考えなければなりません。戦争責任に対して、戦後責任が問われるのかということです。具体的に語れば、日本が朝鮮半島を併合し、その後中国・アジア地域をも支配し、虐げてきたことに対して、今の時代に生きる私たちに責任があるのかです。直接的には責任はありません。しかし過去にあった事実を忘れてはなりません。歴史修正主義は、過去の罪を消し去ろうとします。これに「否」を唱えていかなければなりません。私たちも同じ罪の性質を有しています。これは民族的・国家的なことばかりではなく、信仰共同体としての教会や個人においても、過去に目を背けてはなりません。そして、罪が行われた事実、弱さ故に人を傷つけた事実があれば、顧み、罪を告白し、悔い改めが求められます。こうした事実を忘れることが、罪を繰り返す原因となります。そのため戦後責任が問われます。

その上でネヘミヤは、モーセを通してイスラエルに与えられた主の恵みを顧みます(8-9)。ここでは、イスラエルの民が金の子牛を作ったときのモーセの悔い改め(出エジプト32:11)が念頭に置かれていますが、申命記も用いられています(申命記4:27、28:64、30:3、4、12:5、21、9:29)。

罪を悔い改め、信仰を告白することが大切です。「わたしの戒めを守り、それを行うならば」(9)と語れば、律法主義的に理解されることもありますが、主はイスラエルや私たちが、完全に律法を守ることができないことをご存じです。全的に墮落した私たちが、主の戒めを行い・言葉・心において完全に守ることなど不可能です。その思い、言い換えれば信仰を告白し、主に従おうと願うこと、実際に律法に従って生きようとするのが大切です。結果として、躓いたとしても、罪を犯したとしても、罪を悔い改めるならば、主はその信仰を認め、罪を赦し、救いへとお招きくださいます。だからこそ、祈りとは過去の罪を覚えて告白し、悔い改め、主への信仰を顧みることが、何よりも大切となってきます。

主なる神は私たちの罪を贖い、神の子として神の御国へとお招きくださいます(10)。そのため私たちは、罪を悔い改めた、主を信頼し、主に委ねて祈ることが求められます(11)。主は今も生きて働き、私たちの祈りを聞き届けてくださいます。そのため私たちも、過去の歴史を顧みつつ、悔い改めと信仰告白をもって歩み続けることが求められています。

ペルシャの王アルタクセルクセス王に仕えていた献酌官ネヘミヤは、ペルシャの首都スサにいました(1:1,11)。そしてネヘミヤは、エルサレムの住民より、エルサレムの状況、つまり城壁が打ち破られ、城門が焼け落ちたままである知らせを聞きました(1:3)。

こうした報告を受け、ネヘミヤは泣き、嘆き、主に祈りを献げます(1:4)。キスレウの月(1:1 11-12月)から、ニサンの月(2:1 3-4月)となります。ペルシャのアルタクセルクセス王は、ネヘミヤの異変に気がつきます(2:1b-2)。

ネヘミヤはエルサレムのことが頭から離れたことはありません。職務に就くときはそうしたことを隠して働くわけですが、近くにいる者は気がつきます。アルタクセルクセス王も気になっていたが言葉をかけることができず、4ヶ月経ち言葉をかけます(2)。

このとき、ネヘミヤはエルサレムの現状を報告します(3)。このとき王は、ネヘミヤの言葉に耳を傾け、そしてネヘミヤの願いを受け入れます(5-8)。ここに支配するペルシャの王と、属国とされていたイスラエルとの関係が明らかになります。出エジプトを前にしたエジプトにおけるイスラエルは、鞭を持った者により監視され、ただ命令されたことを行う奴隷でした。しかし、ペルシャとイスラエルの関係はそうではありません。王と親しく話しができ、そしてネヘミヤが王に自らの思いを伝えることのできる関係です。

ペルシャの王は、それぞれの国の宗教を認め、その宗教において、自らのことも祈ってもらい、そして自らの地位を守ってもらおうとした政策を行っていました。このことより、為政者(王)と宗教(教会)の関係も考えることができます。旧約のイスラエルにおいては、本来、主なる神が王を立て、その王がイスラエルの民を治めると共にイスラエルの祭司が宗教的な統治を担っていました。しかしペルシャの属国となり、イスラエルには政治的な王がいませんでした。そのため、政治的な指導者が国を治め、イスラエルも統治しましたが、しかしペルシャでは宗教的なことに関してはイスラエルが責任を持つことが許されました。この関係を、新約の時代において求められているのではないのでしょうか。中世の時代、ローマ帝国とローマ教会の間で主導権争いがありましたが、本来は分けて考えなければなりません。主なる神が、それぞれの国に為政者を立て、そして国を治めさせ、その上で、教会に霊的な統治を求めておられます(参照：ウェストミンスター信仰告白23:1,4)。

ダニエルがバビロンの王ネブカルネツアルに仕え、そしてネヘミヤがペルシャの王アルタクセルクセスに仕えたように、それぞれの国において王の命令には従うことが求められます。「宗教が異なるから、従わなくてもよい」とはなりません。

ネヘミヤがエルサレムを訪れるにあたり、アルタクセルクセス王に西方の長官たちにあてた書状をいただきます(7~8)。ネヘミヤは「神の御手がわたしをまもってくださった」(8)と語るように、主が共にいてくださるからこそ、ネヘミヤの思いは王に受け入れられます。

ここで大切なことは、西方の長官たちにあてた書状を受け取ることでした。ペルシャには広大な属国があり、それらの地域に長官を立て、統治させていました。そこには様々な国の人たちがいました。「イスラエルのため」と賛成する人も、反対する人もいました。しかし、王が記した書状があることにより、反対する者も、聞き従うことが求められます。

たとえ王の書状があったとしても、反対する人たちがいます(10,19)。ホロニ人とは、エルサレムの北西19kmにあるペト・ホロニ出身のサマリアの総督です。アンモン人と共に、イスラエル人を嫌い、エルサレムの再興に反対し、王の書状があろうとも反対することより、彼らの強い意志の表れであるということがわかります。

こうした中ネヘミヤはエルサレムの街を確認し、イスラエルの人たちに語ります(17~18)。イスラエルの民はこの企てに奮い立ちます。主なる神が御霊を通して共にいてくださるとき、人々もそれを受け入れ、そして事態は動き出します。こうなれば、反対する者も止めることはできません(20)。主なる神が共にあるとき、私たちの祈りは聞き入れられます。主が私たちを用いてくださるとき、主はその道を開き、賛成する者・加わり協力してくださる者をお与えくださいます。ネヘミヤの祈りは、同時に主なる神の願いであり、それがネヘミヤとアルタクセルクセス王の同意により動き出します。私たちが日々祈り、そして主にすべてを委ね、主が必要を叶えてくださることを信じるのが求められています。

【祈禱会奨励】「イスラエルの民による城壁の修復」ネヘミヤ記3章、ウ信仰告白26:2 (9/14)

主なる神から召しを受けたネヘミヤは、ペルシャの王アルタクセルクセスの許可を得て、エルサレムに帰り、城壁の修復にかかります。このとき、反対する者もいましたが、ネヘミヤはこれらの反対者たちに屈服することはありません(2:19,20)。

そして3章では城壁を修復することが語られていきます。「補強した、補強に当たった」という言葉が39回繰り返されています。「修復する、修理する」と訳されてきた言葉です。ここで大切なことは、繰り返し「修復した」と語られている時に、それぞれの場所にイスラエル人が配置され、修復した事実です。多くの者が一致して工事に携わりました。

ここに教会のあるべき姿が明らかになります。第一に、主によって召された者、ここではネヘミヤが民に語りかけることです。改革派教会は、長老主義により教会形成を行います。そのため、牧師(教師)と長老が教会の責任を担うべきです。牧師は説教により教会員をリードします。

同時に教会にビジョン、主から託された使命が示されます。これは「計画」、つまり、人間的に計画し行動することではありません。ここでは、ネヘミヤが主によってエルサレムを再建するため、具体的には城壁を修復するために遣わされたのであり、それを実行に移すことです。このとき大切なことは、聖霊の働きを邪魔しないことです。

大宮教会では今、主の恵みにより新しい方々が増えています。そして子どもたちも集まっています。今の大宮教会の具体的なビジョンは、次の世代につながる長老・執事が立てられていくことです。また、新しい方々の中には、大宮教会に来て初めて改革派信仰に基づく信仰生活を送っておられる方々が少なくありません。そのためにも、改革派信仰の教育が繰り返されていくことが求められます。こうしたことを行うことにより、信仰的な一致を求めていかなければなりません。

リーダーシップは、牧師だけではなく教会を治める長老にも求められます。今の教会の状況に合わせ、牧師と長老たちが、つねに教会員一人ひとりを顧みつつ、改革派教会を形成するにあたって何が求められているかを祈りつつ示され、そして小会において確認された上で会員に示されていくことが大切です。

次に教会に集う者たち、教会員の姿が明らかにされていきます。教会に集う者たちは、礼拝・説教の養いにおいて、信仰が培われていきます。このとき、キリスト者として主の御前に一人の神の民として生きることが求められます。しかしキリスト者となるのは、ただ神を信じ、教会・礼拝に集っていれば良いわけではありません。イスラエル人であれば、自分たちがイスラエルであることを理解していれば良いわけではありません。

ネヘミヤは、彼らに対してイスラエル人としてのアイデンティティを取り戻すと共に、今、荒廃しているエルサレムを復興するために、城壁を修復することを語ります。このときに大切なことは、救い主である主なる神との関係を回復するだけではなく、イスラエル・キリスト者として、一つとなることです。つまり神との縦の関係を修復すると同時に、横の関係、イスラエルとして、そして一つの教会に集う兄弟姉妹としての関係を取り戻すことです。そのために大切なことが聖徒の交わりです(参照:ウエストミンスター信仰告白26:2)。

その上で上に立つ者から明確なビジョンが語られることにより、方向性が示されます。聖徒の交わりぬきにビジョンを共有することはできません。ただ礼拝の場に一緒に集っていても、聖徒の交わりとはなりません。意思疎通、清い交流と交わりが必要です。いたる所で、すべての人々に広げられることが求められます。きめ細かな交わりが行われていなければ、必要なときに声をかけても、一致して行動に移すことはできません。

教会において、報告・会議などが行われたりしますが、日頃から主にある兄弟姉妹としての交わりがあるからこそ、一致して決議し、行動へと移すことが可能となります。それが無いところで決議され、報告が行われても、信頼関係がなければ表面的に行動できたとしても、敵の妨害があるとき、なおも心一つにして、一つのことを成し遂げていくことはできません(3:33-38)。コロナになって、教会(特に中会・大会)において、交わり・意思疎通を行うことなく物事が決められていくことが多くなりました。これは教会にとって大きな損失です。交わりを回復することが、今、私たちに求められています。

【祈祷会奨励】「イスラエルの覚悟」ネヘミヤ記4章、ウ信仰告白14:3、17:2 (9/21)

私たちが信仰生活をする中、様々な形で信仰が揺さぶられます。第一に、自らの内になる罪により主なる神から離れてしまうことです。そして第二に、主なる神を信じようとしていても、外敵により迫害され信仰が揺さぶられることです。

捕囚の地から戻ったネヘミヤとイスラエルの民は、エルサレムの城壁の再建を始めましたが、外敵の妨害が行われることが語られていきます(1~2)。イスラエルに対する反対者たちは、主なる神を信じることそのものに対しても反対するでしょうが、そのためにエルサレムを再建することに対しても憤り、妨害活動を始めます(5-6)。

このときイスラエルは、主なる神を信じる信仰に対して試練がもたらされます。そして、信仰を続けて行く勇氣、城壁を再建し続ける力がなえます(4)。

主なる神から与えられた信仰がなければ、この時、主なる神を信じることから離れます。しかし、主なる神によって救いに入れられた神の民は、この時、自分で解決しようとするのではなく、主なる神に祈り、助けを求めます。「わたしたちはわたしたちの神に祈り、昼夜彼らに対し、彼らから身を守るために警戒した」(3)。

自分の力ではどうしようもない中、主なる神への祈りが出てくるのは、主が共にいてくださるからです。ウェストミンスター信仰告白は第17章「聖徒の堅忍について」で、次のように告白します(17:2)。「この聖徒の堅忍は、かれら自身の自由意志に基づくのではなく、〔第一に〕父なる神の自由で変わらない愛から出てくる、選びの聖定の不変性とからである」。艱難な中、祈ることができること自体、主から与えられた信仰の故です。

そしてウェストミンスター信仰告白第14章「信仰について」の第3節で「この信仰は、強弱に程度の差があり、また、しばしば、さまざまなかたで、攻撃され、弱められることがある」と語ります。神さまを信じたから、後の人生は順風満帆ということはありません。信仰が攻撃され、試練がもたらされます。

しかし、主なる神に祈りを献げるとき、主なる神は具体的に、イスラエルが、そして私たちが何をすべきかをお示しくくださいます。この時、主なる神への祈りの答えとして、ネヘミヤは、半分の人たちを作業に従事させ、他の半分の人たちを、槍と盾、弓と鎧を身に着け、将校たちがユダの家全体の背後に控えさせ、警護させます(10)。

信仰があるからと言って、敵に対して防御なしでかまわないということではありません。備えをしなければなりません。新約聖書において、主イエスは「敵を赦す」ように求めておられます。そのためコンタクトをとり、和解に努める努力が求められます。しかし、信仰の故に迫害に遭うとき、武器を手にもすることも必要なときがあります。このことを、「抵抗権」ということで語られます。自分から積極的に敵を滅ぼしに行くのではなく、攻撃に対して、自己生存権を守るために、武器をとることは許されるとの考えです。

ネヘミヤは「わたしは貴族と役人と他の戦闘員に言った。『仕事が多く、範囲は広い。わたしたちは互いに遠く離れて城壁の上に散らばっている。角笛の音を聞いたら、わたしたちのもとに集まれ。わたしたちの神はわたしたちのために戦ってくださる』」(13-14)と語ります。主なる神は、共にいてくださり、必要な戦いを行ってくださいます。

私たちキリスト者は、主なる神により選ばれた民であることの信仰により、主を信じて歩み続けることができるのです。ウェストミンスター信仰告白は語ります。「この聖徒の堅忍は、……選びの聖定の不変性と、〔第二に〕イエス・キリストの功績と執り成しの有効性、〔第三に〕御霊と神の種のかれらへの内住、および、〔第四に〕恵みの契約の性質、に基づく。これらすべてから、また、聖徒の堅忍の確実性と無謬性が生じる」(17:2)。その結果として、救いに導く信仰についても語られています。「この信仰は、強弱に程度の差があり、また、しばしば、さまざまなかたで、攻撃され、弱められることがあるが、ついには勝利を得る。そして少なからざる人の場合、信仰は、わたしたちの信仰の創始者また完成者であるキリストをとおして、完全な確信に到達するまで成長していく」(14:3)。

新約の時代に、主なる神への信仰に基づいて生きるキリスト者として、私たちは、先ほども語りましたように、簡単に武器を取るべきではありません。そのためにパウロは、信仰の武具を身につけるように、私たちに語りかけます(エフェソ6:10-18)。

聖書は、「生活のことをまったく教会で扱ってはならない」とは語りません。教会において求められる愛の業（執事活動・ディアコニア）は、心身に障害がある人たち、経済的な困窮にある人たちを知り、彼らに対して施し・手助けが行われることです。

そのため、経済的な困窮の中にある人が、教会において訴え出るとは許されていると、いいかと思えます。

では、ネヘミヤ記におけるイスラエルの民たちの訴えとはどのようなものであったのでしょうか。ネヘミヤがユダの地の長官に任命されたことが語られています(14)。つまりネヘミヤはペルシャ王の側近として王に仕えていましたが、エルサレムに帰国してからは、ペルシャ王から派遣された責任やとしての働きを担っていました。そのため、ネヘミヤはユダの人々からの訴えを聞く立場にありました。

ユダの人々の訴えは次のとおりです (1-5)。

- ① 飢饉によって食料を得ることができない。
- ② 借金をして、家を抵当にいれなければならない。
- ③ 王が税をかけている。
- ④ 息子や娘を奴隷に売らなければならない。

この訴えを聞いてネヘミヤは、大いに憤りを覚え(6)、貴族や役人たちを非難します。つまり、ペルシャ王が統治し、その役割をネヘミヤが担っていたのですが、実際に彼らから税を徴収しているのはイスラエルにいる貴族や役人たちでした(6-7)。

教会であれば、持っている者が、貧しい者に対して、施しをすることが求められます。しかしここではネヘミヤは、行政官としての対応を行ったと言っていいかと思えます(9-11)。つまり、借金・負債を免除することです。そうすることにより、彼らが、土地や息子・娘を売るようなことをしたりすることがないように配慮を求めます。

そしてこのことは、単なる配慮ではなく、行政官としての命令でした(12-13)。祭司を呼び、誓わせる、これは、神の御前で行われることです。つまり、ネヘミヤが行っていることは、行政官として行うと同時に、神の御前に生きる教会の働きとして行っているということができます。旧約のイスラエルにおいては、為政者が宗教的指導者を兼ねることができ、神の御前にイスラエルという国を建てようとしていたため、こうしたことが可能でした。しかし新約においても、こうしたキリスト教を国教とする国家を形成することが目標であるということができませんが、日本のような異教徒の国においては、行政は、宗教が関わるべきではありません。宗教の違いを超えて為政者がその務めをすることが求められます。そのため、為政者が、神の御前に誓約を求めることは本来できません。こうした違いを、私たちは理解しておかなければなりません。

そしてここではもう一つのことが語られています。ネヘミヤたちは、長官としての給与・手当を受け取らず、要求しなかったことです(14, 18)。つまり、ネヘミヤにとって何よりも大切なことは、主なる神の都エルサレムを再建することであり、そのために城壁の再建が第一のことです。そのため、優先すべきこと、つまり城壁の再建のために必要が満たされることを第一にします。こうしたことは、パウロが、自らの働きのために謝金を要求することができたにも関わらず、自らがテント作りを行うことによりまかない、教会からの謝金や援助を一切受け取らなかったことにおいても、確認することができます。また、現在の多くの牧師においても、引き継がれているのではないのでしょうか。日本のどこの教会も小さく、教会財政が十分ではありません。そのため、謝金を削ってでも、教会のために働き、教会の維持を行っている牧師・教会も、少なからずあるのが現実です。

しかしここで大切なことは、長官としての手当を要求しないように、牧師謝金を削ったり、少なくすることを奨励しているのではなく、何を第一にしているのかということです。つまり、「こうあらねばならない」ということではなく、その時そのときの状況を適切に判断し、一番弱い者、苦しむ者への配慮をしつつ、何を第一にしなければならないかを、適切に判断し、行動することです。教会で「こうあらねばならない」と語られたとき、教会は硬直化し、律法主義となります。

【祈祷会奨励】「策略と密約」ネヘミヤ記6章、ウエストミンスター信仰告白14:3 (10/12)

私たちが信仰生活を続け、教会を形成していこうとするとき、様々な形で、信仰が揺さぶられることが発生します。私たち個人としては、罪の誘惑があります。そして前回5章において確認したように、イスラエル内部（教会内部）における不平不満・さらには分裂なども考えられます。さらに外部の敵、信仰を揺さぶり、さらにはイスラエルにおいては現実的な戦いが強いられます。

今日の御言葉においては、サンバラト、トビヤ、アラブ人ゲシム、その他の人々が、イスラエル、そしてネヘミヤに対して戦いを挑みます。神に敵対する人たちの攻撃はサタンの攻撃と言っても良いかと思いますが、手段を選びません。様々な方法を用います。ここではエルサレムの城壁が完成しようとしていることを阻止することが目的です。目的を達成しようとするとき彼らは手段を選びません。そして、諦めるということを行いません。

最初に彼らが行ったことは、サンバラトとゲシムが使者を使わせることです⁽²⁾。ここでは、「オノの谷にあるケフィリムで会おう」という内容ですが、実際は話し合いというよりは、圧力をかける、おどすことです。一度断ったとしても、彼らは繰り返します。ここでは4度同じことを行います。

そして5度目は、開封した手紙を携えます。使者の言葉を聞かない、手紙を読まないのであれば、開封したものを届け、読ませようとしします^(6b~7)。内容は、ネヘミヤがペルシャ王に反逆して、ネヘミヤ自身がユダの王になろうとしているという噂であり、この噂がペルシャ王に知られることにより、失脚するとのことのおどしです。そしておどすことにより、工事をあきらめ、完成しないだろうということを企てです。

このとき、ネヘミヤは信仰が試されます。誘惑に屈することにより、彼らの攻撃はなくなります。しかし、主なる神によって示された召しとは異なることを行うこととなります。そのためネヘミヤは、まず内容が事実と反することとして彼らの脅迫をはねつけます⁽⁸⁾。

その上で、「神よ、今こそわたしの手を強くしてください」と⁽⁹⁾、主に委ねて祈ります。

私たちが信仰の誘惑に遭うとき、神に反逆する者たちは、手段を選びません。執拗に責めてきます。このときに人間的な知恵、人間的な力に頼ることは、彼らの思う壺です。サタンの誘惑を拒絶した上で、主の御前に頭を垂れ、主に委ねて祈ることが求められます。

10節以降では、更なる誘惑が語られます。メヘタブエルの孫でテラヤの子であるシエマヤは、イスラエルの民であったと思われる。10節を普通に読めば、「聖所で話し合おう」、「良いではないか」とと思いますが、祭司でもないネヘミヤが聖所に入ることは禁じられており、主に御前に罪を犯すこととなります。そのためネヘミヤは、「彼は神が遣わした者ではなく、トビヤとサンバラトに買収されてわたしに預言したのだということをおどしは悟った。なぜ彼を買収したのか。それはわたしが恐怖心から彼らの言いなりになって罪を犯せば、彼らはそれを利用してわたしの悪口を言い、わたしを辱めることができるからである」⁽¹²⁻¹³⁾。

こうしたことを企てたにか、イスラエル内においても、誰が加わったのかが分かっています。女預言者ノアドヤや他の預言者たち、彼らは偽預言者です⁽¹⁴⁾。さらに彼らが秘密裏に行われていたことも、主の御前に明らかにされます⁽¹⁷⁻¹⁹⁾。そして二枚舌を語ることも明らかになります。

私たちは、このように人をだまし、神の民をだます人々がいることを忘れてはなりません。一般においても詐欺師がいます。しかし、私たちはすぐに気がつかないことであったとしても、主の御前にはすべてが明らかにされます。そして、主の裁きが確実にもたらされます。この事実を忘れてはなりません。

信仰により、主にすべてを委ねての祈りは聞き届けられ、主の御業が完成します⁽¹⁵⁻¹⁶⁾。そして、主の御力は、神の民イスラエルばかりか、敵対する人々にも明らかにされていきます。いま、教会には力がないように思われます。しかし主なる神は、なおも私たちと共にあり、イスラエルが敵対する人々に勝利し、城壁を完成させたように、私たちの信仰生活を守り導いてくださいます。私たちには信仰の揺さぶりがあるかと思いますが、なおも主を信じ、主に委ねて祈り求めていきたいものです。

【祈禱会奨励】「エルサレム帰還の真の意義」ネヘミヤ記7章、ウ信仰告白21:2 (10/19)

ネヘミヤ記を学びを続けています。数々の妨害にも関わらず、ネヘミヤの信仰と尽力により、城壁が完成しました。

そして今日は7章1～5節までの短い部分のみを朗読しました。「最初に帰還した人々の名簿を発見した。そこには次のように記録されているのを発見した」(5)とありますが、実は6～72節で語られていることは、エズラ記2章で語られていることと同じです。

ネヘミヤが帰還し、城壁の修復を行ったのは、アルタクセルクセス王の第20年(BC446年)です(2:1,5:14)。その後ネヘミヤは12年間、ユダの地において長官としての働きをおこなっているため、BC434年になります。第7章で記されている帰還者のリストは、第一次帰還者であり、キュロスの第一年(BC538年)です。ですから、ネヘミヤからすれば、バビロン捕囚からの帰還は、約100年前の出来事でした。

ネヘミヤとユダヤの民にとって、城壁が完成したのはどういう状況にあったかを、確認しなければなりません。「日射しの暑くなる時まで、エルサレムの門を開いてはならない。また彼らが任務に就いている間に扉を固く閉ざしなさい。エルサレムの住民に守備態勢を取らせ、各自が自分の持ち場と、各自が自分の家の前を守るようにせよ」(3)。つまり、城壁は完成しましたが、だからといって外敵から守られ、安住することができるようになったかと言えばそうではありません。警護しなければ攻めて来られる状態にありました。

そして、ここでネヘミヤがなぜ城壁を修復することが求められたのかを改めて確認しなければなりません。神の民イスラエルがエルサレムを追われたのは、イスラエルの民が主の御前に罪を犯したからでした。そして捕囚の民とされている間に、カナンに残ったイスラエルの民は、サマリア化しました。また100年前、バビロンから帰還した民が5万人程いました(参照:66・67節)が、彼らは帰還して神殿を再建しました。彼らは困難な中、主を礼拝するために神殿を再建しました。そして皆が一つとなり主を礼拝しました(エズラ3:1)。しかし約100年が経ち彼らの子孫は、ネヘミヤが帰還した際に、協力した人々もいたでしょうが、邪魔をした人たちも少なからずいました。つまり神を礼拝する行為を忘れてしまっていました。つまり、100年前に帰還した人々の子孫は、エルサレムに滞在するだけで、エルサレムに帰還することの本質を忘れ、主なる神を礼拝することを疎かにしていました。つまりネヘミヤは、100年前に帰還した人々のリストを改めて確認することにより、100年前に帰還した人々は、エルサレムに帰還して、神を礼拝することを願い、そのために働いたが、「今エルサレムに生きるあなたがたはどうか？」と問いかけています。

つまり本質を見失ったとき、神殿を再建すること、城壁を再建すること、それを守ることが目的化してしまいます。しかしイスラエルがエルサレムに帰還したのは、神殿において神を礼拝するためでした。城壁に警護を置くのも、中で安心して神を礼拝するためです。

またイスラエルの民は、100年前の志が受け継がれませんでした。そのため、彼らは主なる神を礼拝することはなく、イスラエルの民であることにその存在意義を持つようになっていました。本質を見失ったとき、神の民イスラエルは形骸化しています。

私たちは、改革派教会を形成しています。23日に教会設立55周年記念礼拝を持ちます。また今、夕拝では創立宣言の学びを行っています。私たちは、ここに改革派教会を建て、礼拝していれば良いものではありません。極論を語れば、「改革派教会」の看板を捨ててもかまわないのです。改革派信仰こそが、天国における教会の姿を表す教会であるとの志を持っていますが、「改革派教会」でなければならぬものではありません。看板ではなく、ここにある福音の本質が大切です。キリストによって罪が赦された民が安らかに集う群れが形成されることです。それは福音に基づく罪の赦しであり、和解です。神の真理を盾に、人を裁いてはなりません。誤りがあれば、弱さを受け入れ、包み込めば良いのです。キリストの愛が示され、過ちが示されるならば、悔い改めと理解が与えられます。互いの関係が深まり、意思疎通ができるようになれば、注意を行ったり、誤りを指摘することができるようになります。しかし、十分な交わりが行えていない状況で罪を指摘しても、理解できません。福音の本質、つまり御言葉に忠実な教会を建てること、それと同時に、互いに十分に理解し合える関係を形成することが大切です。

今、私たちは大宮教会設立55周年を記念し、主の御前で礼拝を献げています。私たちは改革派教会を形成し、改革派信仰・長老主義政治・そして善き生活において、天国に通じる純粋な教会を形成しようと願っていますが、教会は罪赦された罪人の集まりであり、罪の混入を避けることができず、躓きも与えてしまいます。そのため互いに赦し合い、和解をもって、新たな歩みを始めることが求められています。そのために今後、私たちがどのような教会形成を行っていくのかを、主がお語りになる御言葉に聴こうと願っています。

今日の御言葉はネヘミヤ記8章ですが、ここまでの流れを確認しなければなりません。バビロンによって滅ぼされたイスラエルは捕囚の民とされましたが、その後ペルシャがイスラエルを支配するようになりました。最初の王キュロスの第一年(BC538年)に帰還が行われ、その後神殿が再建されました。帰還したイスラエルの民は、当初は主なる神を礼拝し、周辺諸国の異邦人たちとも信仰の戦いを行っていましたが、次第に信仰が形骸化していました。彼らは「イスラエルの民である」ことに自負はありましたが、主を礼拝することを疎かにし、信仰が形骸化していました。そうした中、ネヘミヤが主によって召され、エルサレムに帰還しました(BC446年)。帰還したネヘミヤは12年かけて城壁を修復することにより、外敵から守られ、主を礼拝することができるようになりました。

最初に帰還した民は、一人の人のようになり主を礼拝しました(エズラ3:1)。ネヘミヤは、100年前の帰還者のリストを記して(7章)、100年前の信仰者の姿を顧みつつ、改めて今、イスラエルの民に、主を礼拝することを求めます。このときイスラエルの民は、再び一人の人のようになり主を礼拝します(8:1)。彼らは、書記官エズラにモーセの律法の書を持ってくるように求めます(2)。つまり一人の人のようになるとは、すべての神の民が、主なる神を礼拝し、主のお語りになる御言葉に聴くことにおいて一つとなることです。

彼らは夜明けから正午まで丸半日読み上げられた律法の主に耳を傾けました。真に大切なこと、一番大切なことを理解し、御言葉に飢え乾いていたことを意味しています(5-6)。

「彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した」(8)。律法の書はヘブライ語で記されていましたが、当時のイスラエルの人々はヘブライ語の方言アラム語を用いていました。彼らは律法の意味を理解しました。私たちが聖書を持っています。ご家庭でも聖書を読んでもらいたいと願っています。しかし、持つこと・読むことが大切なのではなく、それを理解することが大切です。

ウェストミンスター小教理問89 御言葉は、どのようにして救いに有効とされるのですか。

答 「神の霊が、御言葉の朗読、しかし特に御言葉の説教を、罪人に罪を自覚させて回心させ、さらに信仰をとおして、かれらを清さと慰めにおいて造り上げ、救いにいたらせるのに、有効な手段とされます」。聖書に記されたことの意味が明らかにされることにより、罪を自覚することができ、回心させられます。こうして信仰が養われます。

ネヘミヤとエズラはイスラエルの民に対して「嘆くな、泣くな」と語ります(9)。これは感動して、それで終わってはならないということです。つまり、主なる神から御言葉が語られそれを理解したとき、①回心する、②罪を悔い改める、③信仰を告白する、行動が伴います。そして救いの感謝が教会における①神礼拝、②奉仕、③献げる、行動となります。

彼らは感謝をもって、喜びを分かち合いながら食事をとります(10-12)。今はコロナ禍にあり、残念ながら今日も愛餐会を行うことができません。しかし、御言葉を分かち合うこと、愛餐会を行い互いの交わりを深めることは非常に大切なことです。

そしてここでもう一つ「その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい」。信仰において主なる神との縦のつながりが深められることが大切ですが、同時に、横のつながり、隣人との交わりが深められ、隣人を知り、そして分かち合うことにより、主から与えられた喜び、恵みを共有することが大切です。隣人を愛することがなければ、独りよがりな歪んだ信仰となります。神礼拝と共に、聖徒の交わりが大切です。

大宮教会においても、信仰が形骸化することなく、主の御言葉に聴き・理解し、主による救いの喜びをもって主に仕えることができる主の民一人ひとりが、日々養われ、隣人との豊かな交わりが深められることにより、教会を形成することが求められています。

【祈祷会奨励】「御言葉を深く悟った結果」ネヘミヤ記8:13~17、ウ大教理問157（10/26）

10月31日に宗教改革記念日を迎えますが、先週大宮教会では、10月23日に教会設立55周年記念礼拝を持ち、まさに宗教改革を覚えて礼拝を持ちました。ネヘミヤ記8:1~12は、記念礼拝に相応しい御言葉であり、ここから説教を語らせていただきました。

イスラエルの民は、一人の人のようになり、律法の書に聴き続けました。主の御言葉に聴き、理解するとはどういうことか、ウェストミンスター大教理問答の告白を確認します。問157 神の言葉は、どのように読まれなければなりませんか。

答 聖書は、〔第一に〕それに対する高く敬虔な評価をもって、〔第二に〕それが神の言葉そのものであり、神のみがわたしたちに聖書を理解させることができになるという固い確信をもって、〔第三に〕聖書の中に啓示されている神の御心を知り、信じ、それに従いたいという願いをもって、〔第四に〕熱心に、また聖書の内容と目標に留意しつつ、〔第五に〕瞑想・適用・自己否定・祈りをもって、読まれなければなりません。

イスラエルの民は、まさにこのように主の律法に耳を傾け、理解したのです。

イスラエルの民は、第七の月の一日夜明けから正午まで⁽³⁾、御言葉を聴き続けました。モーセ五書が順番に読まれたのではないのでしょうか。そして二日目、つまり7月2日も、律法の書を読み進めました(14-15a、参照：レビ記23:34, 35, 39-43、民数記29:12-39、申命記16:13-17)。

イスラエルの民は、7月15日に大切な祭りを行わなければならないことが示されました。一度ならず繰り返し語られていることから、その重要性を理解することができたのです。そのため、イスラエルの民はすぐに行動に移します⁽¹⁶⁾。御言葉に聴き、理解するとは、主の恵みに感謝すると同時に、主が求めておられることに聞き従うことです。

「こうして捕囚の地から帰った人々から成る会衆は、皆で仮庵を作り、そこで過ごした。ヌンの子ヨシュアの時代からこの日まで、イスラエルの人々がこのような祝いを行ったことはなかった」⁽¹⁷⁾。ここだけを読むと、ヨシュアの時代以降まったく仮庵祭が行われていなかったように思われるかもしれませんが、過去にも仮庵祭が行われていたことが記されています(エズラ3:4、歴代誌下7:9)。エズラ記3章は、約100年前、このときもイスラエルの民は一人の人のようになっていました。しかし、ここでは十分に意味を理解した上で祭りが行われていなかったため、継続されるということがありませんでした。仮庵祭を十分に理解していなかったため喜びは十分に伴わず、イスラエルの信仰は変質化していきました。

しかしこのときは、イスラエルの民が律法の言葉を深く悟ろうとした結果、その意味を理解して祭りに臨みました。形のみならず祭りをを行うのと、祭りの意味を理解した上で行うのとは、まったく違います。つまり仮庵祭は、ぶどうの収穫感謝の意味と共に、出エジプトを果たしたイスラエルが、荒野において幕屋に暮らし続け、40年後に約束の地カナンに入城することにより神の祝福が完成したことを覚えつつ、祭りをを行います。

彼らは祭りの期間中律法の書に聴き続けます⁽¹⁸⁾。彼らは、自分たちが捕囚から解放されたことを、かつての出エジプトと重ね合わせつつ律法の書に聴き続けることにより、主の御業、救いの喜びに満たされました^(17b)。

私たちは、大宮教会設立55周年記念して礼拝を持ち、さらに10月31日に宗教改革記念日を迎えるようとしています。私たちが御言葉によって改革され続ける教会たる改革派教会を形成するとはどういうことであるかを、改めて確認させていただきます。

一つは神の摂理(歴史)の中に生きる者として、ネヘミヤの宗教改革、主イエスの福音、宗教改革における福音主義を変更する必要はありません。そこからずれているのであれば、主の御前に生きるキリスト者として、御言葉中心を心がけなければなりません。改革派信仰、長老主義政治、善き生活をもって見える教会を建て上げることに変更はありません。

一方、日本において、そして欧米や韓国において、教会から人が離れている現実を見なければなりません。今までと同じことを行うことができなくなっています。長老主義としての中会や地区の交わりを有効に用いることの大切さを顧みつつ、同時に、地区で協力することにより、教会を維持することが求められています。すでに東北中会・四国中会を中心に、一つの教会に一人の牧師がいることは当たり前ではありません。地区や近隣教会との交わりを深め、祈りつつ、備えを行うことを疎かにしてはなりません。

イスラエルの民は、ネヘミヤの呼びかけにより、一人の人のようになり(8:1)、律法の書に耳を傾け、律法によって規定されていた仮庵祭をお祝いしました(8:16-18)。仮庵祭においても、彼らは毎日、律法の書に耳を傾けていました。

彼らは、御言葉を聴くことにより、自らの罪が示され、断食を行います(9:1-2)。つまり彼らは、御言葉を聴き、それが過去の人たちのこと・他人事とは受け取らず、自らのことと受け取り、自らの罪が示されたのです(ウェストミンスター大教理問160)。

そしてネヘミヤ記9:5~37では、旧約聖書全体を顧みつつ、神の恵み・イスラエルの罪・主による悔い改めの呼びかけ・叱責・裁きが繰り返し語られていきます。

ネヘミヤ記9章では、主を讃美することから始まり(5)、主による創造(6)、アブラハムの選び・契約の授与・約束の地(7-8)、エジプトで奴隷とされたイスラエルに対するモーセによる救いと出エジプト(9-15)、出エジプトにおける金の子牛の作成と荒野の40年・約束の地に入る(16-25)、イスラエルの背信・預言者殺し(26-31)、アッシリア・バビロンによる王国の滅亡と捕囚・奴隷化されたイスラエルと神の救い(32-37)が、語られています。

そしてバビロン捕囚から解放され、エルサレムに帰還したイスラエルの民に、御言葉が示されています。旧約聖書の歴史を顧みると一番最後に位置し、キリストの誕生へととなります。ですから、旧約聖書は非常に分量が多いですが、ここで主なる神が、私たちに語りかける言葉は決して多くありません。同じようなことを繰り返して語るにより、イスラエル・そして私たちの持っている罪を示しつつ、そこにある主なる神の恵みと救いがどれほど素晴らしいことであるかを、私たちは理解することが求められています。

特に16節以降、イスラエルが度々主なる神から離れ、罪を犯してきたことを語ります。「背信の大罪を犯した」(18, 26)、「傲慢にふるまいかたくなになり、戒めに従わなかった」(16)と語ります。26、29、33-35節においてもイスラエルの罪が繰り返し語られていきます。

しかし主なる神は、ただただイスラエルの罪を叱責されるだけではありません。「しかし、あなたは罪を赦す神。恵みに満ち、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに溢れ、先祖を見捨てることはなさらなかった」(17節後半)。「まことに憐れみ深いあなたは、彼らを荒野に見捨てることはなさらなかった」(19節前半)。27節後半、31節と、主なる神は、同時に憐れみをもって彼らの罪を赦し、救いの御手を差しのばしてくださいませ。

エズラ・ネヘミヤによって語られたこれらの聖書の言葉を、イスラエルの民は、過去の問題、他人事として片づけず、自分たちの内にもある罪として理解し、悔い改めを行いました。新約に生きる私たち日本人クリスチャンにも、同じ罪があることを受け入れなければなりません。他人事であれば、自らの罪を悔い改めることも、主の御前に自己否定を行い、隣人の前に謙遜になることもできません。今年の標語は「主の支配に生きる—謙遜と自己否定によって」です。私たちは、旧約のイスラエルの罪を他人事として高見の見物ではいけません。イスラエルの民が行ったように、自分事としてとらえ、主の御前にひれ伏し、罪を悔い改めることが、今、私たちに求められています。

ネヘミヤ記9章で語られてきたのは旧約聖書全体の歴史です。旧・新両約聖書において語られていることは2つです。つまり①主なる神による恵み・救いと、②イスラエル・すべての人間の罪です。聖書は金太郎飴です。聖書のどこを読んでも、聖書が語るのは、すべての人間の罪が指摘されつつ、いつでも主なる神は神の民を恵みによって罪を赦し、神の救いへと入れてくださいます。

日本の教会では、新約聖書のみが説教されることが大勢でした。そして旧約聖書があまり読まれません。しかし旧約聖書を読まなければ、キリストによる救い・福音が中心になり、「人間の罪」が疎かにされます。すると信仰がアンバランスになります。そして滅び行く人間の罪・私自身の罪を真に知らなければ、神による救いの恵みを真に理解することができません。救いの感謝が抽象的になり、教会から離れていくきっかけとなります。

だからこそ、旧約聖書を繰り返し読み、イスラエルの罪を通して、私たち自身の罪を悔い改めなければなりません。それでもなお罪を赦し、神の子として永遠の生命をお与えくださる主なる神の愛を知り、信仰が深められていくことが求められています。

イスラエルの民は、ネヘミヤによって呼び集められ、一人の人のようになり、主の御言葉に聴きました(8:1-3)。このとき彼らは御言葉に従う者とされ、規定に従って仮庵祭を行い(8:13-18)、イスラエルの歴史を通して罪を悔い改め、信仰が新たにされました(9章)。

そうした中、イスラエルの民は、神の律法に従って歩み、わたしたちの主、主の戒めと法と掟をすべて守り、実行することを誓い、確約します(1, 30)。

ネヘミヤ記において、イスラエルの民が割礼を授かったことはまったく記されておらず、また無割礼であったことも記されていません。そのため、彼らは割礼を受けていたのかも知れません。そして彼らは、自分たちがイスラエルであり、神の選びの民であることは意識していたかと思います。そのため彼らは、ネヘミヤの呼びかけに答え、一人の人のようになり、律法に耳を傾けることができたのです。しかし同時に、形だけの割礼、名前だけのイスラエルであったのではないのでしょうか。今まで、旧約聖書において主が求めておられたことを何一つ行うことなく、イスラエルとしての意識も希薄でした。

そうした中、彼らは主の戒めと法と掟をすべて守り、実行することを誓い、確約したのです(30)。これこそが信仰告白であり、新生された人となったしるしです。主の御前にあって、主なる神と出会い、罪の悔い改めが示されたとき、主の御言葉に聞き従い、主の教えに従った生活へと促されます。誓いは主の御前にあって重要なことであり、軽い気持ちで行うことではありません。

さて31節以降に、旧約聖書において規定されており、彼らが実行すると誓いを立てた事柄が記されていきます。①イスラエルとして、異邦人と結婚しないこと(31)、②安息日、安息年を守ること(32)、③献げ物、供え物の規定に従うこと(33)、④生け贄を献げること(35)、⑤初物を献げること(36-37)、⑥1/10を献げること(38-40)。これらは、イスラエル・クリスチャンとして意識して生きること、主の日に神を礼拝すること、感謝を献げることです。

御言葉をとおして生きて働く主なる神と出会うこと、主を礼拝すること、自らの罪の悔い改めと信仰を表すこと、救いの感謝し奉仕することの大切さが語られてきました(8-10章)。ここで大切なことは聖書に記されていることを忠実に行う事ではありません。ただ行うだけだと信仰は失われていきます。なぜ・何のために行っているのかを理解していなければ、形式的になり、もう一方では律法主義になります。イスラエルにとって大切なことは、あるときはイスラエルの罪の故に裁き、国を滅ぼし、捕囚の民としつつ、イスラエルを赦し、捕囚から解放してくださる、生きて働く主なる神と出会い、主の恵みに生きることです。そして、今に生きる私たちにとっては、キリストが私たちの罪の刑罰を負うために、人として生まれ、十字架にお架かりくださり、苦しみ・肉に死に、陰府に下されたこと、そのお方が死から甦り、今も天において生きておられること、私たちのために執り成しの祈りを行ってくださっていることを覚えることです。

ここで、献げ物・献金について考えます。主は初物を献げるように求めています(36)。主なる神が植物を育て、実りをもたらしてくださることを理解した上で、植物を育てることにより、最初にして最上のものを神に感謝して献げるという行為になります。その行為そのものではなく、ここにある心・信仰が問われています。

旧約聖書では1/10を献げることが繰り返し語られます。月定献金は1/10が一つの目安です。しかし機械的に1/10を献げれば良いものではありません。主なる神は私たちの必要を満たしてください。このとき主は、主がお与えくださったのだから、「すべてを献げよ」、「半分献げよ」とは語らず、1/10を求められます。1/10を献げると苦しいです。このとき足りない分を、主が備えてくださることを信じて祈ります。これが信仰です。そのため主によって与えられたものに感謝しつつ、今の生活・これからの生活を顧みつつ、少し苦しい位になるものを献金として献げることにより、私たちは生きて働く主なる神との交わりに生きることができます。そして援助が必要ならば、祈り求めれば良いのです。

主に献げられたものは、レビ人のため、現在の教会では教会の働き・牧師の生活のために用いられます。牧師給与が高いか低いか議論されます。牧師の立場からすれば、主に委ねているわけであり、示された金額を感謝して受け入れます。

イスラエルの民は、一人の人のようになり、主の御言葉に聴きました(8:1-3)。このとき、イスラエルの民は、御言葉に従う者とされ、罪の悔い改め、信仰が新たにされました。そして10章では、真の信仰・真の神礼拝を取り戻したと言って良いかと思えます。

このイスラエルの民がエルサレムに住みます。バビロンによって滅ぼされ、捕囚の民とされていたイスラエルは、エルサレムに帰還し、神殿を再建しましたが、エルサレムには住んでいませんでした(7:4)。異邦人の抵抗があり、安全が確保されていなかったからです。そのため彼らは、次第に異邦人に染まって行きました。

つまり神殿があったとしても、周囲にイスラエルの民はおらず、神礼拝のためだけにエルサレムに行き来する生活が続いていました。信仰と生活が一致しない二元論です。そのため時代が下ることに神礼拝そのものが形式化、無実化していた状況に陥っていたのです。

最初の帰還から約100年の時を経て、主はネヘミヤにより、改めてイスラエルの民に帰還をお許しくださいました。その結果、エルサレムの城壁が再建され、イスラエルの民がエルサレムに住むこととなります。

ここで、エルサレムの位置づけを聖書全体から確認したいと思います。主なる神は最初アブラハムを祝福し、約束の地を示されました(創世記12:1~3)。そしてアブラハムは見ず知らずの約束の地を目指し歩み、その後イスラエルの民は、カナンを約束の地としました。出エジプトにおいても、このカナンが約束の地として帰還しました。その後、ダビデ王がエルサレムを彼の王国の首都とし、息子ソロモンの時代に第一神殿が奉献されました。そして、「エルサレムは、主が御名を置くためにイスラエルのすべての部族の中から選ばれた都であった」と語られます(列王記上14:21)。

そして旧約の時代に主なる神がエルサレムを都として選ばれたのは、主イエス・キリストの十字架へとつながります。主イエスはエルサレムに上り、十字架に架けられ、死を遂げられることと三日目の復活を予告されました(マタイ20:17~19)。そして主イエスは平和の王としてエルサレムで迎え入れられます(マタイ21:6~11)。その後主イエスは、エルサレムにおいて逮捕され、十字架に架かれ、肉の死に、墓に葬られ、陰府に下られましたが、三日目の朝に甦りになりました。死に、罪に、サタンに勝利されました。このことが都エルサレムにおいて行われたのです。

そしてさらに、天におられるキリストが再臨する、終末に目を向けなければなりません。主は新しいエルサレムにおける祝福がキリストによって与えられることを予告されます(黙示録3:11~13)。続けて黙示録は語ります。「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た」(21:2)。「この天使が、“霊”に満たされたわたしを大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から下って来るのを見せた。都は神の栄光に輝いていた。その輝きは、最高の宝石のようであり、透き通った碧玉のようであった」(21:10~11)。黙示録の文脈を考えると、18章において大バビロン、大いなる都、強大な都バビロンが滅ぼされます。そして19章において、神の御国が完成し、天における盛大な賛美が歌われます。それが新天新地としての新しいエルサレムが与えられます。

ですからイスラエルの民がエルサレムにおいて住み、信仰と生活が主と共にあることは、聖書の最終ゴール神の国の完成へと向かうことの予表として、旧約聖書の最後の出来事として記されています。聖書のダイナミックな動き読み取ることが求められています。旧約におけるイスラエルの位置づけ、さらには聖書全体における恵みの契約、神の国に向かう神の民としてのキリスト者の位置づけを確認して今日の御言葉を読むことが大切です。

聖なる都エルサレムこそが、私たちが目指すべき神の国の教会です。私たちはこの神の国の教会を、地上において立てることを目指して、改革派教会を立てています。この時私たちに大切なことは、信仰である教会生活(礼拝)と、信仰生活を営む家庭・仕事を分離させないことです。これらが分離したとき、イスラエルの民のように、罪を繰り返すこととなります。そのため私たちは、改革派信仰、長老主義政治、さらに善き生活によりキリストの教会を立て上げています。

ネヘミヤ記を学んでいます。ネヘミヤによって宗教改革が行われ、そして人々は主の御言葉に聞き従い、10章で誓約を結び、さらに11章ではエルサレムに住むということで、終末の完成を意識して記されていることを確認しました。続けて12章では、最初の帰還当初の祭司ならびにレビ人のリストが記され(1-9)、さらに、次の世代の祭司とレビ人のリストが記されています(12-21)。さらに、ネヘミヤ時の主の御前で誓約した祭司とレビ人のリストが記されています(10:1-14)。

これは何を意味しているかといえば、ネヘミヤが改めて捕囚の最初の帰還者のリストを12章において名を記すことにおいて、これらと比較すると、若干異なりますが、同じ名前が多くあることを確認して頂けます。そうすることにより、最初の帰還から約100年の年月を経ても、祭司の家系は、引き継がれてきていたことを、彼らは確認したのです。

つまり、私たちは100年の間にイスラエルの信仰が形骸化し、異教宗教化してきたこと、改めて御言葉を朗読することにより信仰を取り戻したことを確認してきました。そうした中にも、祭司・レビ人の家系が保持されていた事実を確認しなければなりません。もちろん彼らの信仰がどうであったのか、問う必要があります。それでもなお、神殿で礼拝を行い、またここで城壁の奉献式を行うに際して、それを司る祭司とレビ人が保持され、またここで奉仕を行うことが許されています。

またバビロンから帰還した人々は、南ユダ王国出身者(ユダ族・ベニヤミン族)でした。11章ではベニヤミン族に関して語られていますが、この12章ではユダ族に対して語られません(31、32節)。11章では、エルサレムに定住することが、最後の審判と神の国到来を投影する出来事であることを語りましたが、主は罪の贖いの御業を、ユダ族に置かれたのです。

このことは、ヤコブにおいてすでに示されていたことであり(創世記49:8-12、申命記33:7)、イザヤ書ではユダ族であるダビデに対してメシア預言が与えられました(イザヤ7:13-14)。

この預言をイスラエルは信じてきていました。それが「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(マタイ1:1)と語ることによって始められ、実現しました(同1:22-23)。

旧約の時代においては、ユダの人々、そして祭司・レビ人が共に働き(12:43-44)、喜びを共にして、神の国をめざす神礼拝が成立します。祭司とレビ人が礼拝を司ることにより、礼拝の正当性が確保され、その恵みがユダ族のイエス・キリストによって実現します。

そしてもう一つ、礼拝とは喜びである、このことは牧田先生が繰り返し語られています。教会が、救いの喜びの場であることが大切です。最初に、ウェストミンスター小教理問答問1と問38を告白しました。

問1 人間の第一の目的は、何ですか。

答 人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです。

問38 信者は復活のとき、キリストからどのような益を受けますか。

答 復活のとき信者は、栄光のうちによみがえらされたのち、裁きの日に〔キリストのものとして〕公に認められ、無罪とされ、また、まったくの永遠まで、完全に祝福されて神をかぎりなく喜びとするようになります。

私たちがキリスト者として生きること、そして復活し天国における歩みは、神を喜ぶことです。これこそが、神が人間を創造して下さった目的です。この喜びは、地上における教会生活ばかりか、肉の死を遂げても、キリストの再臨により新しい体が与えられ、天国における永遠の生命の間、持ち続けるものです。

私たちは、神礼拝において、こうした本当の喜びの場となっているか、それが問われています。そのために、互いにキリストの十字架によって罪赦され、神の子となったことを喜ぶと共に、聖徒の交わりを深め、互いの弱さ・罪を、互いに赦し合い、理解を深め、そして違い、わだかまり、偏見を無くしていく努力が求められます。教会において、互いのわだかまり、偏見が残っている限り、教会は一つとなり、成長することができません。そのために、心の底からわだかまり、偏見がなくなるように、互いに赦し合い、聖徒の交わりを深めていかなければなりません。

【祈禱会奨励】「御言葉によって改革され続ける教会」ネヘミヤ記13章 ウ大教理問4 (12/7)

ネヘミヤが御言葉である律法を朗読することにより、イスラエルの民は、自らの罪が示され、御言葉に従った生活を行うように促されていっています。ネヘミヤ記13章においても、①アンモン人とモアブ人との雑婚について(1~3節)、②トビヤへの流用について(4-9節)、③レビ人と詠唱者への分配について(10-13節)、④安息日を汚していることに関して(15-22節)、⑤異邦人の女性と結婚することについて(23-28節)、⑥祭司職の汚れについて(28-31節)、の罪が示され、律法に従った改革が行われていきます。

トビヤへの流用について確認します(4-9節)。トビヤはエルサレム城壁が完成するのを妨害してきました(2:10,19, 3:35, 4:1, 6:1,12-19)。この時、アルタクセルクセス王の第32年であり(13:6)、ネヘミヤが最初にエルサレムに来た時(アルタクセルクセス王の第20年:5:14)から12年が経っていました。ネヘミヤがどれ程の期間、アルタクセルクセス王の所に戻っていたかは分かりません。それでも長くても2~3年ではないでしょうか。しかし、御言葉に従って教会を統治するネヘミヤがいない隙に、祭司エルヤシブはトビヤにそそのかされ、罪を犯したと言って良いかと思えます。つまり祭司であっても、主の御言葉に聞き従うという意識は希薄であり、ネヘミヤがそばにいて、指導が入るから従っていたと言って良いかと思えます。ここで問われるのは、誰に従うかではなく、主の御言葉に従っているかが問われています。御言葉に従う意思がなければ、自分より偉い人がいなくなれば、自分で規準を定め、このように律法に反することが行われるようになります。

これらの罪の指摘、御言葉に従って修正することは、ネヘミヤによって御言葉である旧約聖書の朗読が行われることにより、現実の罪が明らかにされるきっかけとなりました。このことはすでに語ってきているとおり、イスラエルであろうと、教会であろうと、罪が赦された罪人が運営を行っているため、聖書の御言葉に聴いているつもりであっても、慣れや習慣のため、次第に御言葉から離れてしまう結果となり、それが罪に表れます。

そのために私たちは何よりも主の御言葉である聖書に聴かなければなりません(参照:ウエストミンスター大教理問4)。そして旧約の時代であれば、旧約聖書における律法の書によって、このように御言葉の朗読によって、すぐに修正することができます。しかし、新約の時代に生きる私たちとしては、もちろん御言葉である聖書に聴くことが求められますが、このとき、人間的な解釈が加わり、その結果として、多くの教派に分かれています。

そのために私たちは、信仰告白において、聖書解釈の規準が必要となります。ですから私たちは、宗教改革において生まれてきた改革派教会に属し、教会で告白された信仰告白に従って教会形成を行っています。そして、私たちの教会が「改革派教会」と名乗るのは、「御言葉によって改革され続ける教会」でなければなりません。「御言葉により原点に返り続ける教会」と言った方が正確かも知れません。

しかし改革派教会であっても各教会によって個性があるように、どうしても各教会において次第に独自の伝統をつくっていくこととなります。このとき次第に、当初定められたことから、少しずつずれていくこととなります。そのため私たち改革派教会では、信仰告白に基づく聖書と共に、教会規定と礼拝指針を定めているのです。これらの定めに従うことにより、御言葉から離れ、独自のスタイルで行うことを避けることができます。

ただここでも一つ注意することがあります。教会規定に定められていることは、聖書に基づき、改革派信仰に基づく信仰告白に基づいて定められています。そのため、なぜそのように定められているのかという意図・本質を理解した上で、用いていくことが大切です。

しかし、今の教会においても自身が感じていることは、すでに定められた規定がある中、教師・長老となっている人たちは、規定を理解して用いることなく、規定に用いられていることもあるのではないかと思います。このとき、なぜこのように定められているのか、その理由・意図・本質を知ることなく、規定されているから行っています。すると次第に、その行為は、形式化し、本質はずれてくることとなり、結果として、御言葉に反すること、改革派信仰からの逸脱、長老主義が求めていることが行われることとなります。ですから改革派教会としては、主の御言葉(聖書)に読みつつ、信仰告白・教会政治・礼拝指針を大切に、それらの意味をしっかりと理解しつつ、教会形成を行っていくことが大切です。